

# 立命電友会

## 立命電友会 会長就任にあたって

瀬見 英利

(昭和46年院卒)

### 目次

P 1	挨拶	挨拶
P 2	挨拶	挨拶
P 3	挨拶	挨拶
P 4	挨拶	挨拶
P 5	挨拶	挨拶
P 6	挨拶	挨拶
P 7	挨拶	挨拶
P 9	挨拶	挨拶
P 10	挨拶	挨拶
P 11	挨拶	挨拶
P 12	挨拶	挨拶
P 13	挨拶	挨拶
P 14	挨拶	挨拶

私は去る平成24年7月7日(土)

に京都全日空ホテルに於いて開催されました第6回立命電友会総会に於いて、ご出席の皆様方のご推挙により、第6代目の【立命電友会会長】に選出頂きました。向こう4ケ年にわたり、その大役に就く事になりましたので、ここに会員の皆様方にご挨拶を申し上げさせていただきます。また会則により会長推薦されました副会長、幹事、会計監事の皆様方、会長委嘱による顧問の皆様方にも活動宜しくお



願ひ申し上げます。

さて、本会は初代得田会長様から、池田会長様、加納会長様、荒木会長様、さらに南前会長様の過去5代に亘りましての歴代会長様には、立命電友会発展のためには、並々ならぬご尽力を賜りました事、厚く御礼申し上げます。歴代会長様方とは比べようもない、浅学、非力の小生が会長職の重職を務めさせて頂く事になり、今はただ大きな責任に身の引き締まる思いでございます。

小生の自己紹介を兼ねて、昔の立命館大学の想い出を述べさせて頂きますと、入学時、茨木市の自宅より、当時の衣笠学舎に通学した折から、自分で言うのもおこがましいのですが、真面目な学生で、授業は時間の許す限り登録し、教室でもほぼ最前列で授業を聞いて

おりました。その割に成績があまり伴わなかったのは、実力のせいかもしれません(苦笑)。与えられたものには、結構真剣に取り組みました。当時の交通手段は電車が主流で、阪急電車の西院駅から西大路を白梅町又はわら天神まで市電で通学しました。等持院・北野天満宮・竜安寺・仁和寺・衣笠山と名所も近く、授業の狭間や休講の時間つぶし等に京都観光等に有意義な時間を過ごしました。クラブは、音響工学研究会に属し、先輩の設計の低音ホーンを作成し、以学館にてコンサートなど催したことも懐かしい思い出です。部室は生協売店の傍のバラック小屋でしたが、暇さえあればたむろしていました。自宅通学ゆえ、残念ながら寮生の楽しそうな生活は経験できませんでした。4年生では、学園紛争も経験しました。中川会館の封鎖、わだつみの像の破壊、4号館(電気教室)の封鎖、機動隊の学園突入等も経験しました。特に機動隊の学園突入時は広小路学舎において、投石飛び交う中におりま

した。隣の人に石が当たり血を流しており、どうしていいか解らずに立ちつくしていると、道路沿いの商店の人がシャッターを開け、怪我人の手当てと、小生など野次馬を店内に匿ってくれました。夕刻、静かになってから帰宅しましたが、戦争を知らない世代の小生にとっては衝撃の時でした。ノンポリで、活動はしないながら、闘争学生の訴えに一理あると感じていた小生ですが、電気棟の封鎖時には、自分達の部屋も中傷や落書き等で汚されました。彼らの理不尽な行為にはついていけないと感じました。大学院修士の2年間で、井上和夫先生のゼミで最適制御を学ばせて頂きました。また、立命館中学での「技術科」の教員アルバイトも経験させて頂きました。騒ぐ生徒を叱る場合も、気の弱い小生でしたが(出席簿を何度叩いた事でしょう)中学の先生が気を利かせて、生徒に『あみえて、柔道・空手の黒帯だから、授業中怒らせると恐いぞ』との噂を流され、当初、五月蝋かった授業が少し静かになったのを覚えてます。未だに、気の弱さは克服できず、今後とも皆様に何かとご迷惑をお掛けするかと思います。ご容赦ください。このバイトでは『ものを教える(伝える)事は学ぶこと』自分が十分理解して、初めて指導が出来るという事を知り、自分の不勉強を改めて認識して発奮しま

した。さて、当時の電気工学科の先生方は、羽村名誉教授・井上勲夫先生・松田先生・山本先生・小原先生・小堀先生・辻村先生・荻屋先生・井上和夫先生・浦山先生・前田先生・小笹先生・青木先生・中西先生でした。また、先輩の院生他の方々に、お世話になりました。皆様の個性のある授業が懐かしいです。お元氣な恩師の方々にお目にかかるのも立命電友会の楽しみの一つですが、最近では訃報が相次ぎ残念でなりません。ご冥福をお祈り致します。また我々同期生でも訃報が多くなりました。なるだけ元氣なうちに機会を作り、集いあうことが大事だと再認識いたしました(これが本来の同窓会の意義かな?)。古いアルバムを見ていると、1966-12-25に辻村先生のお宅に伺った、11名ほどの学生時代のスナップ写真が出て来ました。ご家族に囲まれた辻



村先生の笑顔が素敵でした。教授と学生の間がすごく近かった事を今更ながら思い出されます。卒業後、東京芝浦電気（現在の東芝）に入社し、静岡県富士市・川崎市と15年ほど関東地区で暮らしました。この間、校友会にはほとんど御無沙汰ばかりしておりました。1985年に東芝関西支社に配属され、以来、大阪・神戸・京都を中心に仕事をする事となり、立命電友会の結成時には、中西先生の紹介で、年次役員として参加させて頂きました。BKCへの移転時の見学会にも参加させて頂き、母校への思いも高まりました。以上が自己紹介です。長い駄文の中で、小生の性格などもご推察頂ければ幸いです。

さて、立命電友会の今後の運営

## 新任のご挨拶

電気電子工学科  
教授 鷹羽 浄嗣

2012年4月1日付で理工学部電気電子工学科システム制御工学研究室に教授として着任いたしました。

前任先は、京都大学大学院情報学研究所数理工学専攻で、学生時代を含めると20有余年をそこで過ごしました。立命館大学については、同じ京滋地域の大学として、また、学生時代の恩師である故得

方針ですが、総会でも述べたとおり「継続」をキーワードとして、考えたいと思っております。私案ですが、テーマとしては①立命電友会 homepage の拡充（定期的更新）②若い会員も参加したいと思える事業展開の試行③事業継続可能な健全会計④従来からの参加者も継続して満足頂けるような事業立案と思っております。何分、小生の力不足は否めませんので、諸先輩・会員各位からの叱咤激励とご教示・ご鞭撻を宜しくお願い申し上げます。最後に、座右の銘と記している『一期一会』という言葉電気・電子系に学ばれた機会を一生一度の事と考え、今後の立命電友会を盛り上げて参りましょう。

丸英勝先生が京都大学を定年退職後、亡くなられるまで教鞭をとられたこともあり、以前から親近感を持っておりましたが、この度、教員として籍を置くことになり光栄に感じております。

私の研究の専門分野は、システム制御理論です。システム制御理論は、数式モデルに基づいて、種々のシステムの制御構造を理論的に明らかにし、より高度な制御の方法論を探索する研究領域です。その中でも私は、デスクリプタシ

システムやビヘイビアアプローチといった線形システム理論、入出力変数の大きさに制約のあるシステムの制御などの研究に携わってきました。また最近では、ネットワークを介した大規模システムの分散協調制御に興味を持ち研究を始めています。システム制御理論が扱う対象は今、大きな広がりを見せています。例えば、従来型の工学分野に加えて、システムバイオロジ、ナノテクノロジー、情報通信、そして、エネルギーといった新しい分野にもシステム制御の考え方を導入しようという動きが盛んになっていきます。私自身も、新しいポジションに就いたのを機に、理論と応用の両面において新しい研究テーマにチャレンジしていきたいと考えています。

最近、"There is nothing more practical than a good theory."

という言葉がある事を知りました。もとはレヴィンという心理学者の言葉ですが、物理学者のマクスウェルも同じことを言ったそうです。実際のな問題に取り組みるときにも正しい理論に基づいた論理的思考が不可欠であり、また逆に、良い理論というものは実用的であるべきだという事を言っています。まさにマクスウェルの方程式はそのような理論であると思います。システム制御理論という限られた分野ではありますが科学技術を研究する者として、学生たちにも授業

や研究指導を通じて、この言葉のように理論の大切さ、理論と応用の不可分性を少しでも伝えることができ、優秀な技術者・研究者を育てていければと思っております。最後になりましたが、電気電子工学および立命館大学理工学部電子システム系の発展のため、微力ながら努力していく所存です。今後ともご指導ご鞭撻の程、よろしくお願いいたします。

電気電子工学科  
教授 瀧口 浩一

2012年4月に、電気電子工学科に着任致しました。

出身は茨城県潮来市で、日本第二の面積の湖・霞ヶ浦の近くで高校時代までを過ごしました。今回、勤務地・新居とも同様に自然に恵まれた琵琶湖を臨む場所となったことは何かの縁かと想います。

学部から大学院博士課程まで東京大学・電気電子工学科に在学し、その後、日本電信電話株式会社（NTT）の研究所に20年間勤務しました。在職中、カリフォルニア大学サンタバーバラ校に客員研究員として1年間滞在し、基礎から応用まで層の厚い米国の研究体制に触れる機会にも恵まれました。電子工学科への進学時、ガイダンスで、電気電子系に進学する学生は大抵、1パソコン、2オーデイオ、3アマチュア無線のいずれか

の趣味を持っているとの話があったのを覚えています（現状は随分違うのでしょうか）。敢えていえば私は3に該当しました。無線は趣味ではなかったのですが、小学校高学年頃から中学生時代にかけて、電波で情報を送ることがとても不思議で興味を持ち、ラジオの自作、海外の短波放送の聴取などを細々と続けました。

大学入学時後は半導体レーザー・光ファイバを中心とした光通信の研究の最盛期で、その影響もあり、卒論は多田邦雄先生のご指導の下、半導体レーザーの研究を行いました。当時大学院生の中野義昭先生からも厳しくも示唆に富むご指導を受け、研究者としての第一歩を踏み出しました。大学院進学時には大越孝敬・保立和夫両先生の研究室に配属され、保立先生のご指導の下、共振型光ファイバジャイロの研究に取り組みました。当時この研究は世界で数か所の機関でのみ行われていました。田舎育ちでのんびり屋の私にとって、研究を本格的に開始する時期に、研究人口の少ない本テーマに出会えたのは幸運でした。最初は相当苦労しましたが、じっくりとテーマに取り組むことができ、新規な成果をいくつか出すことができました。オリジナリティの高い成果を創出する研究の醍醐味に徐々に惹かれ、当初は就職に多少有利であろうとの認識のみで進学した大学院に博

士課程まで在籍しました。

NTT研究所に就職後は、主に石英平面光波回路(PLC)技術を用いた光通信用高機能光デバイスの研究開発に従事しました。大学院時代とは打って変わり、関連研究人口が桁違いに増えたこと、通信バブルの時期に重なったために、在職期間の中盤を中心に忙しい研究開発生活を送りました。新しい成果や良好なデータを出して束の間喜んでいても、油断しているとベル研究所などの研究者に数か月後には先を越されてしまったこと、研究開発の死の谷に何度か直面したことなどの悔しい思い出もありました。

光通信産業の成熟度が上がってきたこともあり、前職では徐々に新規テーマへの参入が難しくなってきたこと、環境負荷低減・安全安心向上の観点からの研究も重要との想いも高まったため、大学・公的研究機関への転職を考えていました。この度幸いにも立命館大学に奉職できた次第です。着任後日が浅く、まだまだわからないことだらけですが、最初に印象に残ったことは、光関連の授業・実験のカリキュラムが充実していることです。光エレクトロニクスの勉強がしたく電子工学科に進学したところ、光の授業は計二つだけで、学生実験もヘリウムネオンレーザを用いた干渉実験のみだった私の学部時代と比較すると本当にうら

やましく思います。大学では、低消費電力かつ災害に強い光ネットワークの実現に寄与可能な光信号処理技術の研究を進めるほか、安全安心な社会を実現可能な光センサ・光センサネットワークの研究も行う予定です。また、ほかの先生方との共同研究も行いたいと思っています。

現在の私があるのは、大学の恩師、会社の上司に恵まれたおかげです。現状を鑑みると、これらの方々には遠く及ばず、様々な面で勉強を続けなければならないレベルですが、今まで得た知見・経験を生かして立命館大学での教育・研究に微力ながら貢献したいと思っています。現在、日本のエレクトロニクス産業・教育は厳しく難しい時期にありますが、その解消に向けて、教員という立場から小さな貢献を続けたいと思いますので、ご指導、ご鞭撻の程何卒よろしくお願い申し上げます。

電子情報工学科  
教授 久保 博嗣

2012年4月より、電子情報工学科に教授として着任致しました。

私は、三菱電機株式会社に26年間勤務し、今回電機メーカーの研究者から大学教員という新たな道を歩むことになりました。企業在籍時は、鎌倉にある情報技術総合研

究所で、無線通信システム、主として、列車無線、衛星通信、防災無線、携帯電話等のための無線通信技術の研究開発を実施し、開発技術を製品に搭載し社会に出してきました。これからは、これまでの経験を生かして、社会の安全・安心に役立つことを目指して、無線通信システムのための信号処理技術(無線信号処理技術)、ならびに、この技術の応用分野の拡張に関する研究教育活動を実施していく所存です。

私が、信号処理技術の研究に興味を持ったのは、大阪大学工学部通信工学科の研究室にて「適応フィルタ」という技術と出会ってからです。ハードであるフィルタが自ら学習して自らの形状を変化させるといえるのは、今でこそ当たり前かも知れませんが、当時学生であった私にとっては新鮮な「驚き」でした。その後、研究室では指導教員、先輩や後輩と一緒に、適応フィルタなどの信号処理技術の理論を研究しつつ、パソコンで適応フィルタを実際に動作させるためのプログラムを作成しました。当時のパソコンは、現在と比較すると「おもちゃ」のような処理能力しかなく、プログラムの処理量削減に追われる毎日でした。しかし、苦勞のいかいもあり、パソコン上で適応フィルタが思い通りに動いた日の「感動」を今でも覚えています。この研究室での経験があ

り、社会に出て、このような信号処理技術に関する研究を行いたいと思うようになりました。

三菱電機入社後は、無線通信システムの研究開発に携わることになりました。運よく、携帯電話の急速な進展をはじめとする無線通信システムのデジタル化の波に出会うことができ、信号処理技術を製品開発に活用する機会を得ることができました。電機メーカーの研究ですので、理論や方式検討ばかりでなく、性能評価、装置製作、現地試験という、製品開発全般のステップに深く関与することができました。その過程で、製品を世に出すためには、多くの苦勞が必要なることも身をもって知りました。しかし、そのような苦勞も自分が関わった製品が社会で使われているのを見ると、吹っ飛んでしまうという喜びも味わうことができました。

今、社会も技術も変化の時代と言われており、色々な不安が世間を広く覆っているように思います。確かに、変化への対応に注力することは重要ですが、技術者として長い間活躍するには何か核となる自分の技術を持つ必要があると思えます。私自身、まさか大学で学んだ技術が数十年に渡り、自分の核となる技術になろうとは夢にも思っていませんでした。私の好きな言葉に、「恒産なくして恒心なし」という言葉があります。変化

の時代であるがこそ、自分の核となる技術をしっかりと持って変化に臨むべきであり、私ができる助けをできれば幸せだと考えています。

この度、立命館大学にて教育・研究に携わる機会を与えて頂き感謝しています。この教育・研究には、私のこれまでの経験をフィードバックしていきたいと考えています。一つは、電機メーカー出身者という経歴をいかして、最終的にモノとして社会に出すという視点を持ち、技術においては「理論」「評価」「物作り」というそれぞれのステップが重要であることを伝えていきたいと思っています。もう一つは、学生時代の経験をいかして、技術に対する「驚き」と「感動」という気持ちを研究室で共有し、この気持ちを研究における「工夫」のエネルギーとしたいと思っています。

初めての大学教員職に就き、毎日が勉強の連続という感じですが、非常にやりがいのある仕事であり、充実した毎日を送っています。これから、これまでの経験をいかして、立命館大学の発展のため、そして、日本の科学技術発展のために、微力ながら貢献していきたいと思えます。最後までありがとうございました。皆様のご指導、ご鞭撻、よろしくお願い致します。

## 立命館での学び

田中 亜実

(博士後期課程2回生)

私が立命館大学の電子情報デザイン学科に入学したのは2005年の4月でした。学部を卒業、そして博士前期課程を修了して、現在は博士後期課程に在籍しています。当時、立命館大学に入学したばかりの私には、将来像として今の私自身を想像できていたかといえば、少しも考えていなかったというのが正直なところです。大学入学から現在に至るまで多くの人との出会いや数々の貴重な教え、体験が現在の私を形作ってくれました。この度、幸運にも本原稿を執筆する機会を頂いたことは、今後の社会生活を歩む前に、私自身の今までのことを振り返るよい機会になると考え、稚拙な文章ではありますが、お話させて頂くことになりました。

私が立命館に初めて出会ったのは、さらに3年さかのぼる2002年の4月でした。小学生の時から卓球を続けていた私は、高校紹介のパンフレットで「勉強と部活動の両立」という言葉を見つけたことをきっかけに、立命館高校を

受験しました。入学してからは文武両道を目指し、さらに同じクラスや部活動の仲間など多くの友人を作り、時には勉強や部活動のことで悩みながら、様々なことを学ぶことができました。その中で、私を大きく成長させてくれ、また、電子情報デザイン学科に出会わせてくれたのが、2年生時に新しく設置されたスパークサイエンスコースでした。教科書の内容に加えて、数学や科学を中心に、大学の最先端の研究についての特別講義の聴講や、研究所の見学、先生方と自分達とが協力して企画運営を行った、国内外の学校との合同研究発表会などここでは挙げきれないほどの様々な経験をすることができました。これらの経験から、私は将来、何か新しいものを作りたいと思うようになりました。さらに、当時、LSIについて少し興味を持っていたこともあり、進路希望時に、「LSIについて学ぶことができ、それを用いた回路設計の研究ができる学科」について、当時お世話になっていた高校の先生

に相談したところ、電子情報デザイン学科を勧めた頂き、この学科へ入学することに決めました。電子情報デザイン学科を選んだことは大正解でした。半導体の基礎からアナログ回路やデジタル回路設計、コンピュータアーキテクチャ、情報処理などハードウェアとソフトウェアの両方について幅広く学ぶことができました。これらを学んでいく上で、両方の知識を持っていけばシステムを作る場合に全体を把握でき、様々な角度から考えることのできる技術者になれると感じ、そのような技術者を目指そうと考えるようになりました。また、学部時代にはたくさんの友人と出会うことができました。特に、同じ学科、中でも同じグループのメンバーとは学部時代のほとんどを一緒に過ごした気がします。学部時代に学ぶ専門科目の内容は難しいものが多く、講義の内容を理解するために多くの時間を費やしました。また、毎週のように提出が必要なおレポートに追われて徹夜をすることも多々ありました。友人とは、苦しい時には励まし合い、講義内容や課題等で分からなかったことや、疑問に思ったことは話し合い、それぞれの意見や考えについて議論することもありました。勉強だけでなく、

昼休みのトランプゲームやくだらない話、友人の家での鍋パーティなども友人とのいい思い出です。学部時代を有意義に過ごせたのは、興味のあった分野の専門科目について学べたことに加えて、一緒に過ごしてきた友人がいてくれたおかげだと思えます。

また、何よりも私の生活に最も影響を与えているのは、3回生の後期から始まった研究室での研究活動です。研究室紹介の時に聞いた自然エネルギーを用いたバッテリーシステムに興味を持ち、発電源からシステムまで全てを試作・検討し、シミュルかつ低消費電力な回路で実現させるマイクロパワーシステムの研究を行っている道関教授の研究室を選びました。私が初めて受け持ったテーマであり、現在もメインテーマとして研究を続けているのが、尿発電センサーシステムです。このシステムは、尿発電センサー部に尿がかかることで発電し、その電力で無線信号を送信します。将来はおむつに適用することで、介護現場などでの介護者の負担等を軽減できればと思います。日々研究を進めています。

研究を始めた頃は、教科書で学んだ知識だけではなかなか解決できないことばかりで、実際に自分達で考えた回路を組んでも、上手く動作しないことばかりでした。道関教授に回路設計の難しさや考え方、コツを教えて頂きながら実践を重ねることで、少しずつ回路設計の感覚がつかめるようになってきました。そして、何日も試行錯誤して試作した回路が動いた時には大きな喜びを実感することができました。今では、尿発電センサーシステムを中心にいくつかのテーマに携わらせて頂き、新しいシステムや回路について考えるたびに、新しいものを作り出す難しさと、それを実現させる楽しさを実感しています。

私は、立命館大学で学び、切磋琢磨し、成長できたことを心より感謝しています。

最後に、今回このような機会を与えてくださいました、立命館電友会事務局の皆様には深く感謝致します。また、研究の難しさとそれを超える楽しさを教えてくださいました道関教授をはじめ、ご指導、ご支援を頂いた諸先生方、先輩、友人、後輩、家族の皆様には、今後の自身の活躍をもって感謝させて頂きたいと思えます。

苜屋先生を偲んで

中西恒彦  
(昭和41年卒)

苜屋先生が立命館大学へ招聘されたのは1964年のことです。当時は電子機器の播種期で、例えばオシロスコープは真空管を30本も内蔵していました。今から思えば大変高価な測定器であって、操作も複雑であったと思います。真空管からトランジスタへ移行の時期でもありました。元々弱電指向であった私にとって、卒業研究の研究室選択では、このような高価な測定器を使いこなされる苜屋先生にあらがれを感じ、一直線に苜屋研究室を選択し、無事に受け入れて下さいました。学部の卒研テーマは極一般的なものでしたが、大学院では放射線測定器に関するテーマを付与され、オシロスコープを使いこなさなければならぬとなりました。この過程で苜屋先生は丁寧に二重掃引の必要性も教えて頂きました。

その後、縁があって苜屋研究室の助手に任用され、放射線測定器の改良などに携わりました。この時期、オペアンプもトランジスタを使って自作しなければなりません。特に放射線計測ではパ

ルス信号を取り扱わなければならない、高速性を確保しつつ増幅機能も要求され、苜屋先生のご指導の元、高速演算も実現出来るようになりまして。先生自身が経験されてきた電子回路技術に感銘を受けました。小生のこの後の研究にもこの経験は大いに活かすことが出来ました。この過程で放射線はランダム現象であり、測定器も電子回路も定常信号のみならず、ランダム現象に対応するべきものとして指導を受けました。

この過程ではランダム現象の測定には、測定行為を単なる測定器の使用に留まらず、測定行為を「どのようにして計るか」「測定結果をどのように表現するか」「測定結果をどのように活用するか」を良く吟味しなければ測定対象の性質を表現することが出来ない、との示唆をうけました。この体系的な考察によって「計測行為」が成立するとこの示唆を与えられました。体系的な考察を抜きにして「計測」は成り立たない、と強く助言されました。この考え方は多くの卒業生や研究生も共感され、

ランケン(ランダム現象解析機器応用研究会)我々研究者仲間ではこのように略して呼んでいました)を立ち上げられ、それまで学外からの頻りに先生の元に研究打ち合わせに訪れておられた方々を統合して研究者間のコミュニケーションを可能にされました。この研究会には多くの研究者が参加をし、学位取得者も輩出されるようになりました。この研究会でも、測定技術を単なる測定器の使用法から脱却すべきものとして位置づけられ、「計測技術」のあり方を指導してこられました。

更には計測技術の体系化を推進められ、計測対象の測定量を多次元的に表現することで、計測対象の物理的性格を広く把握出来ることを提案され、国内外の学会で発表されてこられました。特にドイツの研究者、あるいはまた、英国の研究者に感銘を与えてこられました。この考え方は研究者の間で大きく評価され、「計測科学」として語ることが妥当であるとの評価を受けてこられました。この考え方を体系的な研究体制として位置づけを行ってこられ、多様な計測対象を開発され、計測対象の物理的表現、更には対象の社会的表現や社会的効果までも挑戦されました。

この結果、国際的な計測学会

I M E K Oでも評価され、研究者としての招待講演者に推挙されるに至りました。(写真1)また、研究発表会での座長も積極的に引き受けられ、ついには国際会議のプロモーション役も引き受けられるようになりました。また各国の計測技術の研究者仲間から賞賛をされるようになられました。(写真2)

苜屋先生のこれらの行動は、計測行為を思想として、また計測哲学として言及してこられ、人と機械の関係を繋ぐ学問体系にもこまれました。この言及は電気工学の範疇を大きく広げ、工学分野、社会分野にも幅広く影響をもたらす可能性があると考えられます。その意味で苜屋先生は大変貴重な存在であったと思います。

しかし、もう存在して居られないのです。2012年の3月に他界され、今更ながら貴重な存在であったことを痛感させられます。論文指導や、計測哲学の意見展開を拝聴する機会も持つことが出来なくなりました。今更悔やんでも遅いと感じる次第です。改めてこの稿をお借りして苜屋先生に追悼の意を表するとともに、ご冥福を祈ります。



国際会議での研究発表▶  
(写真1)



◀ドイツの研究者  
Dr. Friedrich Hofmann  
教授との懇談(写真2)

# 小堀富久夫先生を偲んで

田中寿雄  
(昭和35年卒)

この春、小堀富久夫先生が、94歳の生涯を全うされ、ご逝去されました。

丁度12年前に発行された本会報16号の寄稿文に先生ご自身が語っておられますが、先生は、勤労動員等で殆ど講義などなかった戦時下の立命館専門学校を終戦の年に卒業になり、一度は本学の助手に就かれませんが、強い向学心から再度、京都大学工学部電気工学科に入学されました。しかし、教科書もない戦後の物不足から、そこではノート講義が中心で、必死でペンを走らす受講と欧文タイプで文献を写し取る苦勞が、却って充実した勉学体験をしたと述懐されています。

昭和23年に京大を卒業されると、直ぐ本学にお戻りになり、以来30



数年間、電気工学科、今でいう電子工学・情報工学分野で学生の教育とご自身の研究に励まれました。OB諸氏との会話に小堀先生のお名前を出す、決して実験レポート提出時の苦勞話に花が咲きます。前述の会報では、先生ご自身も半分以上の紙面にその思い出を語っておられますが、これについては、小生にも別の意味で忘れ難い思い出が残っています。

小生が本学に入学した昭和31年当時は、電気系学科として電気工学科が一つしかなく、強電も弱電も、すべてが一つに纏まっています。無線工学志望の小生は、一般教養時代から小堀先生の単位をとることが夢でしたから、先生の講義には勢い熱が入りましたが、いざ始まってみると、教科書は英文で厚さが56ミリもある「F. E. Ternan の [ELECTRONIC AND RADIO ENGINEERING] です。英語が苦手の小生にとって、これは大変なことでしたから、必死に講義を聴き、ノートをとる努力をしました。まさに教科書がな

かった京大時代の先生の様子です。しかし、この体験で小生は小堀先生の教育方針に一つの重要なカギを見出すことができました。話題となった実験第3部の回顧文で、先生が「実験を通じて現象の物理的意味を理解して欲しく、その理解の仕方をチェックするためにレポートの点検を重要視した。」と述べておられる通り、先生が強調されたのは、単に理論や数式を覚えるのではなく、実践で役立つ物理的意味をしっかりと理解することだったのです。お蔭で小生自身は実験レポートで一度も苦戦した経験がなく、話題の騒ぎにはまったく気が付きませんでした。

卒業が近づいた時、先生の助手をしてもらった竹地三郎氏が、立石電機株式会社(現オムロン)に入社されることになり、山本茂先生からお声掛けを頂いて、後任の助手をやらせて頂くことになりました。当時の電気工学科は木造平屋建てで、東に大学院棟、西に学部棟が、通路を挟んで縦に連なっており、西棟手前の助手室には4人の助手がいて、真向かいに小堀先生のお部屋がありました。奥の電気実験室入口にある準備室のカウンター前には、何時も実験レポートを手にした学生の列ができていましたが、年度末が近づくと人数

が多くなり、順番取りに朝早くから寒い建物の外に並ぶ様になるので、小生も早めに出勤して扉を開け、助手室のストープに火を入れて中に招き入れる日が続ききました。そんな折、学生が手にするレポートを覗くと、案の定、立派な数式や文章が並んではいるものの、肝心の物理的意味を示す記述が見当たらず、その日も不採用になって戻ってゆく学生の姿から話題の現象を知った次第です。

例を反結合発振器にとると、難しい発振条件の数式など書いてなくても、図の様に3つのパラメーターの関係が示せてあれば無事合格する筈です。要は、先生が、何を理解することが一番大切だと仰っているのかを掴みとることが重要だった様に思います。

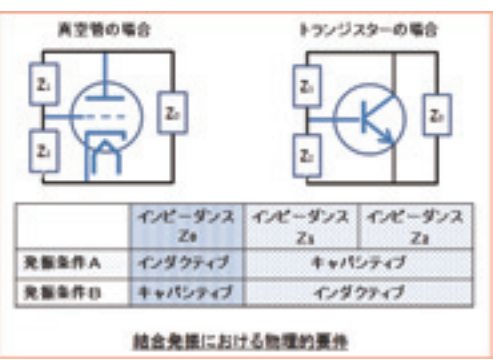
助手をして2年目、北側の高台に4階建ての電気工学部棟(4号館)が完成、木造校舎から引越しました。ここでは助手にも、一人一室が与えられ、小生の部屋には、小堀先生が導入された最新鋭の研究設備として、当時日本に3台しかないと言われたトランジスタアナライザー、コイルのQを測るQメーター、まだ非同期型が主流の時代に、岩崎通信機がシンクロスコープと称していた水平トリガー同期型オシロスコープなど、

超一流の機器を配備して頂きました。当時は大学の設備の方が企業より充実していたので、企業からの委託研究が多く、小生もオムロンから委託された近接スイッチの発振特性解析や、歩留まり安定化の研究に携わりました。

先生は、定年後も卒業生の経営する会社の研究室長として、研究員の指導に当たられたほか、晩年はドイツ語の勉強に熱中されたと伺っています。音響機器の特性を聴き分ける優れた音感をお持ちで、ピアノもお上手でした。一度お目に掛りたいと思いつつ機会を逸している内に旅立たれたことが残念でなりません。心よりご冥福をお祈り申し上げます。

合掌

合掌



父・小堀富久夫の死去について

小堀 聡 (昭和60年卒) 龍谷大学理工学部 教授

電友会の会報で父・小堀富久夫の死去について取り上げてくださるといふことで、息子であるわたしから、父の死去および晩年について少し述べさせていただきます。

父は平成24年4月19日12時53分に京都九条病院にて亡くなりました。細菌性肺炎と心不全という診断です。享年94歳でした。

その3日前に倒れて入院していたのですが、病状が急変したというのでわたしが病院に駆けつけました。ときにはすでに心臓が停止してしまっていたので、実際の死亡時刻はそれより30分ほど前になります。最期は母に看取られて静かに息を引き取ったということです。葬儀はドイツ在住の姉夫婦の帰国を待って、4月22日に近親者で済ませました。

実は昨年5月下旬に白内障の手術を受けた後に肺炎となり、緊急入院をしました。その際、レントゲンで見ると片方の肺が真っ白という状態で、担当の医師からはあと2、3日が山との話があり、姉夫婦が急遽帰国という事態になりましたが、身体が丈夫だったおかげか、奇跡的に回復し、8月には

退院できるほどになりました。

しかし、入院生活が長かったため、車イスで生活しなければならぬ状態になりましたので、9月中旬に西大路八条にある介護付きの高齢者マンションに、足腰の弱ってきている母とともに引っ越しをいたしました。そして、伝い歩きで歩けるほどになっていきましたが、再び肺炎になり今回は心臓の機能も低下して死に至りました。

晩年は耳も目もかなり悪くなり、足腰も弱くなり、また、前立腺肥大もあり、日常生活がなんとかできるというぐらいでしたが、母となんとか支え合って過ごしておりました。

そんな折、一昨年にはわたしのところに長女が生まれ、ようやく孫の顔を見せられたので、少しは親孝行できたかと思っています。

しかし、94歳、立命を定年退職してから約30年、本当に長生きしてくれたと思います。お疲れ様と書いてあげたいと思っています。



『立命電友会第6回総会・創立20周年記念祝賀会』報告

副会長 田中 寿雄 (昭和35年卒)

今年も25年振りに金環日食が観られた年であったが、わが立命電友会も10年ごとのラウンド記念と4年ごとの定時総会が重なる20年に一度のめでたい年に当たった。そこで2010年2月27日の臨時役員会において「創立20周年祝賀会・第6回総会準備委員会」の設置が決まり、その年の11月より都合11回の委員会々々合を通じて、細部にわたる準備が進められた。

今回の企画の大きな特徴としては当会の財政事情を考慮して本体会計への負担を極力軽減すべく、個人・団体・企業等の協力を得て寄付金を募る方策をとったことにあるが、お蔭で必要経費の約半分を賄うに足る多くの賛同が得られ、結果的には本体会計に一切負担をかけることなく運営することができた。中でも個人会員からのご厚志が約半分と予想を大きく上回り、加えて「院生の会」や「学年同期会」「企業内同窓会」「地区支部」などの団体グループからも温かいご協力を頂いたので、時節柄多く



南 能寿会長



瀬見 英利新会長

を期待できないと案じていた企業からの不足分を補うに十分であった。改めて各位のご支援ご協力に衷心より厚く御礼を申し述べます。さて、会場となった京都全日空ホテル2階ロビーでは、受付開始と同時に大勢の参加者が続々来場され、久々の再会に握手を交わし談笑する和やかな光景があちこちに繰り広げられた。

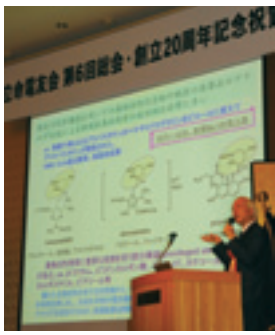
第1部の総会は安江委員の力強い開会宣言で定刻通りに始まり、南会長からバナー広告採用等で大きく変革したホームページの充実とこれに伴う会報のWEB化、卒業・修了記念祝賀会に併せて行う立命電友会入会式の実施など、第5期活動の報告とともに各種ご協力への謝意を含めた挨拶があり、続いて服藤電子システム系学系長からも祝辞を頂いた。

議長選出手続きで満場一致のご承認を得て小生が議長席につき、1号議案の第5期事業報告(高山委員説明)、会計報告(津田委員説明)、会計監査報告(前田会計監査役)、2号議案の役員改選・新会長候補(役員会案・高山委員説明)のそれぞれを諮り、異議なく了承された。そこで選出された瀬見新会長推薦の次期役員名簿が配布され、その陣容が紹介された。3号議案の会則1部改訂の承認をもって予定された議題の審議を終了、瀬見新会長の就任挨拶の後、安江委員が閉会を宣言して総会議事は滞りなく終了した。

暫時の休憩の後、当大学創薬科学研究センター長・薬学部教授の北泰行先生(薬学博士)をお迎えした記念講演会に移り、「大学から新薬創生への挑戦」と題したご講話を頂いた。日本の薬学の歴史には医薬品の開発研究を行う者と薬剤師として医療・保健業務に携わる者を創出する2つの大きな流れがあるが、当大学では前者の医療薬学充実のための6年制薬学部

を期待できないと案じていた企業からの不足分を補うに十分であった。改めて各位のご支援ご協力に衷心より厚く御礼を申し述べます。さて、会場となった京都全日空ホテル2階ロビーでは、受付開始と同時に大勢の参加者が続々来場され、久々の再会に握手を交わし談笑する和やかな光景があちこちに繰り広げられた。

第1部の総会は安江委員の力強い開会宣言で定刻通りに始まり、南会長からバナー広告採用等で大きく変革したホームページの充実とこれに伴う会報のWEB化、卒業・修了記念祝賀会に併せて行う立命電友会入会式の実施など、第5期活動の報告とともに各種ご協力への謝意を含めた挨拶があり、続いて服藤電子システム系学系長からも祝辞を頂いた。



記念講演

が平成18年に創設されたとのこと。新薬開発は成功すると莫大な利益を生むものの、一般的には膨大な時間とお金がかかり、企業との連携も極めて難しいこと。そうした中で大阪大学と共同で癌自然移行抑制剤を求めた研究に取組み、最近、一定の成果が得られたことなど、私たちには普段見えない分野での苦労話などをお聴かせ頂いた。最後に南会長がお礼の言葉を述べ、花束を贈呈して、第6回総会はすべてのプログラムを無事終了した。

創立20周年記念祝賀会は同じ会場で天野新副会長の開会宣言によりまず式典が開幕、舞台上に整列した合唱団メンネルコールの合唱に合わせて、全員が起立して校歌を斉唱した。久しぶりに歌う校歌にテンションの高まりを覚えた方も多かったことと拝察する。

司会者から来賓の方々の紹介があり、ご来賓代表として副会長の渡辺公三様と理工学部学部長の坂



根政男様から、各々ご祝辞を頂いた。

まず渡辺副総長からは、2015年に茨木市に新キャンパスを設立、立命館中学校・高等学校を長岡京市へ移転することを計画しているほか、2020年には、もうすぐ移転後20年が経過するBKICと衣笠キャンパスを拡充する「学園ビジネスR2020」を進めていること、近時、立命館大学は、志願者数の伸び率が全国有数の大学であることなどをお聴きました。

つづく坂根理工学部学部長からは、1994年に6学科でスタートしたBKICが現在11学科で1万名近い入学者を擁する規模になり、個性も学力もバラエティに富んだ学生で溢れている。これからの課

題は大学のブランド力高揚にあり、教育と研究の質をどの様にするか、物理科学科の「物理駆け込み寺」、数学科学科の「数学相談室」、電気電子工学科の「学修カルテ」の様な実践型教育を拡充して行きたいなど、その抱負が語られた。

改めて南会長から、創立20周年を迎えたことに関しての慶びを込めた挨拶があり、つづいて司会者が朗読するナレーションと正面に映し出されたパワーポイント画像によって、1992年の創立当初8268名でスタートしてから、今年13098名まで発展した立命電友会20年の歩みが紹介された。熱心に見入る会員の中には、走馬燈の様に昔が蘇り、万感の想いを抱かれた方も多かったのではないだろうか。

天野新副会長による式典閉会宣言からわずか十分で、ご来賓を含む約280名が隣接する懇親会場の円卓に席を移す大移動もスムーズに運び、いよいよ懇親会が始まった。

冒頭、舞台には祇園甲部の舞妓4名・芸妓5名が登場、舞踊に先立って、「一見さんお断り」故に、永い伝統や文化がありながら馴染みが薄く多くを知らないこの世界についての知識を得て頂こうと、司会者から花街の歴史やしきたり、舞妓と芸妓の違いや修業内容、衣装や飾りもの、仕草についての意味やきまり等の解説が行われた。

舞台裾に着いた2名の地方の三味線と唄に合わせ、「女ひとり」や「祇園小唄」など3曲が優雅に舞われ、会場を魅了した。

瀬見新会長の発声による乾杯で懇親会に移った後もしばらく、綺麗どころがお酌をしながらテーブルを回り、華やいだ談笑が会場一杯に展開した。宴も終盤に入ると、各テーブルから同期のメンバーが入れ替って壇上に上り、先生も加えての写真撮影が続いていた。最後に全員で応援歌を合唱したが、スタンドで声を囁らして声援を送った往時を再現し、隣り合う仲間を肩を組み、心から楽しく歌う姿もあちこちに見受けられた。

13時半に始まった総会から、あつという間の5時間が経過、加藤新副会長が挨拶に立ち、次なる総会・祝賀会での再会を誓いつつ閉会を告げて、お開きとなった。

最後に、本会開催に当り、精力的に準備に関わって頂いた関係者の皆さん、随所にご協力を頂いた方々、本日の運営を支えて頂いた事務方の皆さんに、心からの御礼を申し上げますと共に、会員諸兄のご健勝をご祈念申し上げます。

ところで、開催日の7月7日は



理工学部長 坂根政男様



副総長 渡辺公三様

七夕、私事で恐縮だが、この日は小生の誕生日で、かつ後期高齢者と称される年代に仲間入りした日であり、私にとってこの記念日は忘れ得ぬ思い出の日となった次第である。





新役員紹介

- 会長 瀬見 英利 (昭和44年卒)
- 副会長 田中 寿雄 (昭和35年卒)
- 田野 佳則 (昭和46年卒)
- 加藤 義彦 (昭和55年卒)
- 会計監査 荻田 泰廣 (昭和46年卒)
- 横井 猛彦 (昭和59年卒)
- 幹事(事業) 堤 誠 (昭和36年卒)
- 津田川 勝 (昭和44年卒)
- 高山 茂 (昭和59年卒)
- 田口 耕三 (平成3年卒)
- 森岡 泰雄 (平成4年卒)
- 川畑 良尚 (平成6年卒)
- 久保 幸弘 (平成9年卒)
- 今井 茂 (教員)



- 幹事(会計) 津田 見眞 (昭和44年卒)
- 顧問 辻村 寛 (昭和28年卒)
- 加納 久雄 (昭和30年卒)
- 前田 稔夫 (昭和30年卒)
- 中島 一郎 (昭和31年卒)
- 池田 育弘 (昭和32年卒)
- 井上 和夫 (昭和33年卒)
- 浦山 隆 (昭和33年卒)
- 荒木 敏 (昭和34年卒)
- 南 能寿 (昭和42年卒)
- 幹事 清水 賢吉 (昭和25年卒)
- 岡本 一郎 (昭和30年卒)
- 西村 明男 (昭和31年卒)
- 安田 義彦 (昭和31年卒)
- 中井 信治 (昭和31年卒)
- 小船 弘明 (昭和32年卒)
- 大槻 二朗 (昭和33年卒)
- 稲越 孝典 (昭和33年卒)
- 畑 保雄 (昭和34年卒)
- 岩木 将丈 (昭和35年卒)
- 大森 弘雄 (昭和36年卒)
- 安江 正勝 (昭和36年卒)
- 米澤 益男 (昭和36年卒)
- 一守 福造 (昭和36年卒)
- 平井 嘉男 (昭和36年卒)
- 山岡 均 (昭和36年卒)
- 岡野 鏝一 (昭和37年卒)
- 馬場 實 (昭和37年卒)
- 小寺 章 (昭和38年卒)
- 星野 恒彦 (昭和41年卒)
- 中西 健雄 (昭和41年卒)
- 四方 正之 (昭和42年卒)
- 森原 清 (昭和42年卒)
- 尾崎 裕 (昭和43年卒)
- 横田 政雄 (昭和43年卒)
- 竹林 剛毅 (昭和43年卒)
- 山田 勝昭 (昭和43年卒)
- 竹中 勝昭 (昭和43年卒)

- 森下 明憲 (昭和44年卒)
- 石井 英敏 (昭和45年卒)
- 山下 勉 (昭和45年卒)
- 加納 塙寔 (昭和45年卒)
- 奥村 次夫 (昭和45年卒)
- 高杉 雅昭 (昭和46年卒)
- 疋田 純一 (昭和46年卒)
- 矢島 俊行 (昭和46年卒)
- 木敷 和彦 (昭和46年卒)
- 小西 正秀 (昭和47年卒)
- 山本 惠二 (昭和47年卒)
- 山下 勇 (昭和47年卒)
- 永原 隆嗣 (昭和48年卒)
- 今川 博文 (昭和48年卒)
- 藤井 力広 (昭和50年卒)
- 稲田 耕史 (昭和51年卒)
- 島田 義一 (昭和51年卒)
- 織田 勝也 (昭和51年卒)
- 上田 吉敬 (昭和51年卒)
- 馬場 賴孝 (昭和52年卒)
- 磯田 伸和 (昭和53年卒)
- 藤本 政博 (昭和53年卒)
- 宮下 晋哉 (昭和53年卒)
- 吉松 秀幸 (昭和54年卒)
- 岡島 弘之 (昭和55年卒)
- 小川 清 (昭和55年卒)
- 岡田 幸生 (昭和56年卒)
- 杉本 一番ヶ瀬幸男 (昭和56年卒)
- 田村 繁治 (昭和57年卒)
- 久保村 浩 (昭和59年卒)
- 塚本 充 (昭和61年卒)
- 山本 昌弘 (昭和63年卒)
- 田中 謙一 (平成元年)
- 本庄 晋次 (平成3年卒)
- 澤村 正樹 (平成4年卒)
- 諏訪 雅弥 (平成4年卒)
- 吉川 雅博 (平成5年卒)
- 澤田 正則 (平成5年卒)
- 堀内 正則 (平成5年卒)

- 威徳井 浩 (平成7年卒)
- 中垣 充弘 (平成7年卒)
- 華山 浩伸 (平成8年卒)
- 藤山 直之 (平成9年卒)
- 竹田 佳正 (平成9年卒)
- 川上 知之 (平成12年卒)
- 村上 理沙 (平成14年卒)
- 森川 貴世 (平成18年卒)
- 南 扶友子 (平成22年卒)
- 幹事(教員) 荒木 努
- 泉 友論
- 宇野 重康
- 馬杉 正男
- 小倉 武
- 笠原 健一
- 小野 雄三
- 龜井 且有 (昭和53年卒)
- 北澤 敏秀
- 久保 博嗣
- 熊木 武志
- 小松 康廣
- 齊藤 茂
- 左貝 潤一
- 高倉 秀行
- 鷹羽 清嗣
- 瀧口 浩一
- 谷口 一徹
- 道関 隆国
- 富山 宏之
- 沼居 貴陽
- 服藤 憲司
- 福井 正博
- 福水 洋平
- 藤枝 一郎
- 藤田 智弘
- 藤野 毅
- 峯元 高志 (平成13年院卒)
- 森本 朗裕
- 山内 寛紀
- 山崎 勝弘

### 同窓会だより

#### 12年 辻村・前田研、 浦山研合同同窓会

今年の合同同窓会は立命電友会  
総会の日程に合わせて、会場も同  
じ京都全日空ホテルにて7月7日  
12時より催されました。

私たちの合同同窓会は2003  
年の第1回目以来今回で7回目を  
迎えますが、27名の参加で短時間  
ながら盛大に行われました。

冒頭の辻村先生の挨拶では「81  
歳を迎えたが88までもかく頑張  
る」との決意表明。浦山先生も負  
けてはられずと、日々の元気な  
様子を語っていただきました。

また、永きにわたり立命電友会  
としてご尽力されてきた南会長に  
も参加いただき、私たちの絆の広  
がりを感じました。

一方、この1年間に永眠された  
小堀先生、荻屋先生とともに辻村  
研のメンバーでもあった小山先生  
の訃報も紹介され、参加者全員で  
思い出深い先生方の冥福をお祈り  
しました。

私たちの合同同窓会を実務面で  
支えてくれている幹事の森岡会計  
より飛び入りの結婚の披露があり、  
皆の祝福の拍手でさらに会場は盛  
り上り。

ヒートアップの最後は恒例の前  
田プロによる記念撮影会。先生の  
顎と手の動きに合わせて一同が右  
往左往の楽しいひと時でした。

約1時間の合同同窓会を終え、  
引き続き立命電友会総会に合流し  
ました。  
藤井力広(記)



#### 第9回電四六会 (1971年、昭和46年卒)

今年の同窓会は立命電友会創立  
二十周年記念大会の日程に合わせ  
て総会、祝賀会の後、同京都全日  
空ホテルにて開催しました。10  
周年記念大会では16名でしたが、  
今回は19名(同伴者2名)の参加  
です。10年を振り返りまた今後の  
人生などを語り楽しい時間を過  
ごすことが出来ました。第1回目  
の同窓会は有馬温泉で開催です。

それから毎年続けており会の名称  
も電四六(でんしろう)と命名し  
ております。これまでに40名以上  
の参加していただいております。毎回初  
参加の方も沢山おられます。また、  
この10年の歳月に2名(城さん、  
大藪さん)の方がお亡くなりにな  
り残念で成りません。ご冥福をお  
祈りいたします。

都合上参加できない方からも今  
も現役ですとか、第2の職場です  
とか、野菜作りなどの趣味に精を  
出しているとか、体調がすぐれな  
い等の近況報告を頂いております。  
電四六会は今後も続けてまいり  
ますので還暦を過ぎたこの時にも  
う一度青春に振り返り学生時代の思い  
出を語ろうではありませんか。参  
加しようと思われる方は是非同窓  
生に声をかけてください。

今回の参加者(敬称略)です。

- 天野、石井、長村、梶原、河原、  
古門、下野、高杉、辻、直本、  
長井、中道、中村、疋田、森田、  
矢島、山口、山本、荻田

荻田泰廣(記)



2002年 第1回同窓会

#### 昭和42年卒同期同窓会 (1967年、昭和42年卒)

我々昭和42年卒業生は、去る7  
月7日(土)立命電友会第6回総  
会・創立20周年記念祝賀会に合わ  
せて総会、祝賀会終了後、卒後45  
周年記念同窓会を18時半過ぎから  
京都全日空ホテル和室宴会場にて、  
辻村先生、前田先生、浦山先生の  
ご臨席を賜り、同伴者も含め総勢  
20名近くで賑やかに開催するこ  
とが出来ました。

記念写真撮影、開催の挨拶の後、  
歓談に入り、その後各先生方から  
ご挨拶を賜り、人生に対する貴重  
なお言葉を頂き、60代後半になっ  
ても人生まだまだ修養が足りない  
と痛感した次第です。

当時のアルバム等を見て楽しん  
だ後、恩師の各先生方に各卒論の  
代表者が先生のご健康とご長寿を  
お祈りし、大学時代に学問の道を  
ご教授頂いたお礼と感謝の意味を  
込めて花束とお土産を贈呈させ  
て頂きました。その後健康に留意し  
て、第二の人生をゆるりと過ごそ  
うと4年後の再会を約束して惜し  
みながら散会となりました。

代表幹事 南 能寿(記)



立命電友会第6回総会・創立二十周年記念祝賀会のご報告とお礼

立命電友会前会長 南 能 寿

平成24年7月7日(土)に京都全日空ホテルで開催されました立命電友会第6回総会・創立20周年記念祝賀会には、多数のご参加を賜りまして本当に有難うございました。

つつがなく盛会裏に終了し、私も第五期の会長として有終の美を飾ることが出来まして感謝しております。

総会・祝賀会開催の為に奮闘努力していただきました各役員様、準備委員、事務局、関係各位の方々、更にはお忙しい中お越し頂きましたご来賓の方々にもあらためてお礼を申しあげます。

立命電友会創立20周年と言う節

目にあたり、このように立派に開催出来た事は各会員様、役員様、ご協賛企業様、他諸団体様のご寄付がありました事も申し添えておきます。

第五期の会長職にご推挙頂きまして、早くも4年が経過してしまいました。その就任の際に目標としました「開かれたそして魅力ある」立命電友会作りを目指して4年間頑張ってきました。

その目標の1つ目は作る会長として

事業、広報、財政の3つの作業部会を作り立ち上げ、各役員の皆様積極的にこのワーキンググループの一員となって発言討議して頂いて、各役員が積極的に動き活性化出来たことです。

2つ目はネットの会長としまして

世の中インターネット情報化の時代と云われて久しいのですが、立命電友会もそれに乗り遅れることのないように、立命電友会独自でWeb上に立命電友会のホームページを立ち上げる事が出来たとです。

諸費用捻出の為各企業様を訪問しましてバナー広告のご協賛を得ました。ここに各企業様にはあらためてお礼を申し上げます。

このホームページ立ち上げにより、本会の目的でもあります「会員相互の親睦と社会的ネットワークの形成」と言う目的にもかない、この運用により会員の皆様と相互発信出来ますことは重要な意義

があり、立命電友会の今後の発展に大きく寄与出来たのではないかと思っております。

立命電友会報も過去のものから最新版までいつでも好きな時間に自由に閲覧可能となりました。また立命電友会と各役員、会員様との連絡網としてメーリングリストの整備を行いリアルタイムでのお知らせも可能となりました。

3つ目は聞く会長としまして

今まで会員様のお声が何にも反映していない、ただ会員として立命電友会に属しているだけで不満のお声も聞いておりましたので、今回初めて会員の皆様にアンケートを実施致しまして、ご意見を吸い上げることが出来、立命電友会の今後の方向性を見出せたのではないかと思っております。

4つ目は行動する会長としまして

立命電友会関連の行事即ち役員会、関東立電会、九州沖縄支部、理工系同窓会連絡協議会、数物会、情報会等の各学科同窓会、事業、広報、財政の各部会、顧問会、幹部役員会、電子システム系卒業時の立命電友会入会式、会員様の弔問など、さらに今回の総会記念祝賀会の11回にわたる準備委員会など延べ80回ほどの行事に参加しました。

その間には各企業様を訪問し立命電友会活動に対してのご理解とご協力をお願いし東奔西走しましたことが懐かしく思い出されます。

5つ目は見せる会長として

立命電友会の会報の発行の度に「会長活動報告」を行い会長としての活動を皆様にお見せして、何をしているのかを透明化し、発信する事が出来たことです。

このあと発行の立命電友会報で最終回の第7回目の報告となり、延べ83項目となりまして、楽しみに読んでいただいた方々には感謝を申しあげます。

6つ目は取り組む会長として

昨年の東日本大震災発生後、臨時役員会を開きWeb上で励ましメール、各会員様に義捐金のお願い、東日本地区におられる会員様をリストアップして役員各位に電話で被災状況の問い合わせと手助け出来る出来ないかなどを、お聞きして立命電友会として活動できたことです。

以上の取り組み活動が出来ましたのも各役員の皆様のご協力の賜物と思っております。4年の間ご活動いただきました各役員の皆様、事務局の皆様にご感謝を申し上げます。

この後立命電友会第6期に入っていきますが、新会長のもと益々の発展を遂げていきますよう会員の皆様のご協力をこれからも宜しくお願い申し上げます。

終わりに4年間の温かいご支援とご協力に感謝を申し上げ、会員の皆様のご健勝をお祈りしまして筆を置きたいと思っております。ありがとうございます。

ありがとうございます。

計 報

卒年	氏名	
昭20年	小堀富久夫	平成24年4月19日
昭31年	山下 實	平成23年11月5日
昭32年	菊屋 公明	平成24年3月23日
昭35年	西村 奎蔵	平成23年9月29日
昭44年	野崎 博之	平成18年
昭55年	中尾 好輝	平成24年7月12日
昭62年	谷田 秀一	平成24年3月3日

心よりご冥福をお祈り申し上げます。

事務局便り

立命電友会会報39号の発行にあたり、ご寄稿頂きました皆様に対し、心よりお礼申し上げます。

今回は、総会及び祝賀会の記念特集号として、ページ数が多くなっております。HPの方にも「総会・創立20周年記念祝賀会」を掲載しておりますので、ぜひご覧になって下さい。

住所変更及びアドレス変更等がございましたら、ご連絡をお待ちしております。宜しく申し上げます。(宮林)

立命電友会連絡先  
〒525-8577

滋賀県草津市野路東1-1-1

立命館大学理工学部電子システム系内

立命電友会事務局 高山 茂

宮林和子(月・木)

電話 077(561)2662

FAX 077(561)2663

E-mail: kma98019@se.ritsumei.ac.jp

http://ritsumei-denpukai.com/

(会報の題字は久保之俊氏)

第7回 南会長【活動報告】

- 65、2012年2月27日(月)13時、寄付金御礼状の草稿を作成。2012年2月28日(火)14時、1回目の寄付振込
- 67、2012年3月17日(土)10時、立命電友会第6回総会・創立20周年記念祝賀会の第9回準備委員会出席。15名出席。挨拶後、案内資料・余興進捗状況など討議を行う。参加者確保について役員が各年度の同級生に周知を徹底し、参加依頼と募金・寄付についても一層の勧誘をお願いする。
- 68、2012年3月17日(土)13時、立命電友会臨時役員会開催。21名出席。挨拶後、準備委員会で討議内容を報告。参加者・寄付金状況を報告。招待者・来賓の方々のリストアップ。次期役員選出について報告と検討する。祝賀会余興の部で、正式依頼書を草稿し了承する。
- 69、2012年3月19日(月)13時、2回目の寄付振込。ローム(株)へ協賛寄付金をお願いを依頼する。平成年度の役員が少ないので、知人を推薦する。同期の方を新役員に推薦する。「第6回南会長活動報告」の掲載草稿文を了承。
- 70、2012年3月21日(水)18時、立命館大学卒業式後の立命電友入会式、電気システム系主催の卒業祝賀会への出席が所用のため欠席。田中副会長に会長代理を依頼。
- 71、2012年4月14日(土)14時、立命電友会第六回総会・創立20周年記念祝賀会の第10回準備委員会出席。12名出席。挨拶後、案内資料、今後の活動報告など討議を行う。参加者確保については、役員が各年度の同級生に更に周知を徹底し、再度の督促勧誘をする。
- 72、2012年4月15日(日)、立命電友会第6回総会・創立20周年記念祝賀会参加へ同期生の電話にてお願いをする(10人内諾)。
- 73、2012年4月19日(木)、立命電友会第6回総会・創立20周年記念祝賀会の案内状(再)を作成し、各役員にメール送付し、参加者確保に向けての催促をする。同期生(11人内諾)9時30分、ローム(株)澤村社長と面談のため会社訪問する。立命電友会第6回総会・創立20周年記念祝賀会へのご寄付をお願いする。澤村社長は他吉見部長、白木リナー様にもご同席を頂き、バナードアと今回の寄付に關してお礼を申し上げ、今後とも立命電友会への応援をお願いする。会談後澤村社長と記念撮影し、会報特集号に掲載の了承を頂きました。
- 74、2012年5月11日(金)9時、ローム(株)澤村社長と面談のため会社訪問する。立命電友会第6回総会・創立20周年記念祝賀会へのご寄付をお願いする。澤村社長は他吉見部長、白木リナー様にもご同席を頂き、バナードアと今回の寄付に關してお礼を申し上げ、今後とも立命電友会への応援をお願いする。会談後澤村社長と記念撮影し、会報特集号に掲載の了承を頂きました。
- 75、2012年5月20日(日)13時、立命電友会定例役員会開催。23名出席。事業報告・決算報告・監査報告・事業計画・予算案など討議。第10回準備委員会での討議内容などについて報告。参加状況、寄付状況など報告。招待者・来賓のリストアップ。次期役員選出について内定事項の報告あり。辻村先生より葎屋先生の訃報報告があり、出席者で黙祷を捧げました。
- 76、2012年6月5日(火)14時、コンクリートコーリング(株)藤尾会長に立命電友会創立20周年記念祝賀会へのご寄付をお願いし、ご了承をえる。
- 77、2012年6月10日(日)、立命電友会第6回総会・創立20周年記念祝賀会参加へ同期生に催促のお願いをする。(内諾5人)
- 78、2012年6月16日(土)13時、立命電友会第6回総会・創立20周年記念祝賀会の第11回準備委員会開催。14名出席。会長挨拶後、参加者・寄付金について最新状況の説明あり。当日の全体スケジュールの説明あり。討議をする。当日、役員の役割分担を確認する。また、当日の資料の役員改選案・会則の改訂など検討・討議する。同期生の出席者目標25名達成する。更に残りの期間、周知徹底し再度催促勧誘運動をする。
- 79、2012年7月7日(土)12時、立命電友会第6回総会・創立20周年記念祝賀会が京都全日空ホテルにて開催。直前に同ホテルにて辻村・前田・浦山研合同窓会が開催され出席する。各先生方を始め、幹事会会長の藤井様、会員様には常日頃諸活動にご協力を頂いている事と今回の多数の出席者勧誘活動に対して謝辞を述べる。
- 80、2012年7月7日(土)13時、立命電友会第6回総会・創立20周年記念祝賀会が京都全日空ホテルにて開催。第一部の第6回総会では、会長挨拶後諸議事があり、講演会も無事終える事が出来た。第二部の記念祝賀会では、校歌斉唱・来賓祝辞の後、会長挨拶をする。休憩後、余興のあと、宴会に入り歓談後応援歌を合唱し終了する。
- 81、2012年7月7日(土)18時40分、立命電友会第6回総会・創立20周年記念祝賀会後、同ホテル別室(和室)で昭和42年卒の同窓会を開催。辻村先生・前田先生・浦山先生にもご臨席頂き、総勢30名程で歓談する。各先生

\* 第5期の会長職も4年の任期を終え、今回で南会長の「活動報告」は終了します。会員の皆様には、私のささやかな4年間の活動を知って頂けたかと思っております。開かれた魅力もあつた会を目指して活動したつもりですが、いたらぬ事も多々あつたかとは思いますが、お許しください。会員の皆様のご健勝をお祈りしております。

テクノ電子株式会社

担当者 坂本

〒555-0024 大阪府西淀川区野里2丁目23番19号

E-mail sales@tekuno-d.co.jp

TEL 06-6477-2900 FAX 06-6477-2901

http://www.tekuno-d.co.jp

コンピュータ機器、電子計測器、電子部品関係の総合会社です。

電話、FAX、メールにてお気軽にお問い合わせください。

Aiming to be a Global Only One Company with Unique Technology

マスフローコントローラ  
液体気化供給器

流体計測技術のバイオニア

 株式会社 **リンテック**



ローム(株)社長と

コンクリートコーリング株式会社

電話：06-6924-4517

電子部品・特注品～  
各種計測機器の事なら  
小林計測器(株)

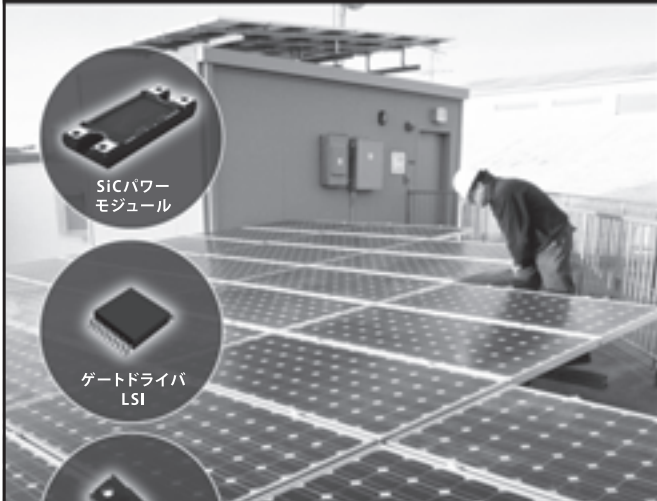
担当：方志

TEL: 06-6829-1122

E-mail: kobakei-k@mbs.sphere.ne.jp

# 最先端のエレクトロニクス技術で 明日の暮らしを支えたい。半導体のロームです。

ロームは快適な暮らしと持続可能な社会づくりに貢献するために、高品質で革新的な製品の開発に取り組んでいます。



**POWER**

発電システムや電源の高効率化で、  
もっと創エネ・省エネに

- SiCパワーモジュール
- ゲートドライバLSI
- 高耐圧パワーMOSFET



**LSI SYNERGY**

アナログLSIとデジタルLSIの技術融合で、  
もっと高性能に

- 車載向けLSIチップセット
- インプット/アウトプットHUB LSI
- パワーマネジメントLSI



**SENSOR**

モバイルからヘルスケアまで。  
活躍の場を広げる多彩なセンシング技術

- 加速度センサ
- 近接センサ
- センサ制御ローパワーマイコン



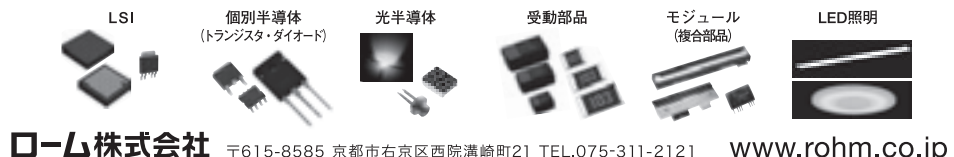
**LED**

チップLEDから、LED照明まで。  
光の技術で暮らしをもっとエコで快適に

- チップLED
- LED電球
- 照明用ハイパワーLEDドライバ

京都・東山花灯路

LSI      個別半導体 (トランジスタ・ダイオード)      光半導体      受動部品      モジュール (複合部品)      LED照明



**ローム株式会社** 〒615-8585 京都市右京区西院溝崎町21 TEL.075-311-2121 [www.rohm.co.jp](http://www.rohm.co.jp)

